

Title	アラン・ミハイル論文の掲載にあたって
Author	塚田 孝, 佐賀 朝
Citation	都市文化研究. 21 巻, p.96-97.
Issue Date	2019-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科 : 都市文化研究センター
Description	特集 : 国際共同研究「周縁的社会集団と近代」から
DOI	10.24544/ocu.20190418-007

Placed on: Osaka City University

アラン・ミハイル論文の掲載にあたって

塚田 孝・佐賀 朝

一

現在、我々は日本学術振興会「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業」に採択され、「周縁的社会集団と近代—日本と欧米におけるアジア史研究の架橋」(2017～19年度：研究代表・塚田／事務局長・佐賀)に関する共同研究に取り組んでいる。

本共同研究は、大阪市立大学とイエール大学の間で長年にわたって取り組まれた、日本史分野での周縁的社会集団の近代化に関する研究交流を基礎に構想された。共同研究を通じて、多様な社会集団が自ら多くの史料を残す日本社会の特徴をアジア諸地域の近代化と比較することで、共同研究に参加する各研究者が、それぞれの地域社会の特質をより深く自覚することが可能になると考えたのである。

それを具体化するために、日本の日本史・アジア史の若手研究者がイエール大学やシンガポール国立大学(NUS)、上海大学での在外研究に従事するとともに、海外連携研究者を招へいして、大阪市大と海外連携先の間で有機的な国際研究ネットワークを構築し、日本と欧米圏のアジア史研究の新たな架橋を目ざしている。

その一環として、現在、オスマン帝国史を専門とする上野雅由樹氏と守田まどか氏がイエール大学に滞在し、本論文筆者のアラン・ミハイル氏(イエール大学教授・海外連携研究者)との共同研究に従事している。そこでの成果をオスマン帝国史の分野以外の人たちにも共有し、比較史の作業につなげていくことが重要であると考え、ミハイル氏の論文の掲載を著者に承認していただき、上野氏にその和訳をお願いした。我々は、今後も、海外連携研究者の論文を継続的に紹介していきたいと考えている。

本共同研究では、その成果を共有し、日本とアジア諸地域の比較につなげるため、2019年度に関連する海外連携先や日本側の関係者が参加する国際円座(国際シンポジウム)を予定している。本誌で海外連携研究者の論文を紹介することは、国際円座での議論を内実あるものにするための基盤ともなるであろう。

二

訳者である上野雅由樹氏の解題にもあるように、本論文は、イスラム社会における長い歴史的な展望の中で、オスマン期のエジプトの大都市カイロにおける犬と人間の関係の転換を論じたものである。

まず第1節では、イスラム教における犬の唾液を不浄とする見解がどのように乗り越えられていくのかが整理されている。その前提には、都市カイロにおいて、大量に街角に捨てられるゴミを野犬の群れが処理してくれることが最も大きな有用性であったが、それに加えて犬の行動から薬草を見分けること、猟犬としての利用や軍事的な利用など、多様な形での「犬の社会的有用性」があったことが紹介されている(第2節)。こうした社会的有用性を持つ犬を不浄だとして都市社会から排除することはできなかったのである。

しかし、19世紀の前半を転機に、犬の社会的有用性が失われ、病気の媒介者、汚物と騒音の発生源と見なされ、社会秩序に対する脅威として、カイロの都市社会から排除されるようになったことが指摘されている(第3節)。この転換に欧米からやってきた者たちの影響があることは言うまでもない。しかし、皮肉なことに、こうした転換の先に20世紀の愛玩動物としての犬と人間の関係が出現することになったと展望されている。

日本史において、犬と人間の関係が最も注目されたのは、元禄期の五代将軍徳川綱吉による生類憐み令をめぐってであろう。生類憐み令に関する通念を再検討した塚本学氏は、17世紀半ばの江戸で、武家奉公人やかぶき者たちが野犬・飼犬を問わず殺し、食するような風俗が広がっていた点を指摘し、綱吉の生類憐み令はこうした状況を踏まえて、初発には動物を「愛護」する側面も含まれていたことにも注意を向けるべきことを提起したのである(塚本『生類をめぐる政治』平凡社、1983年)。

しかし、ミハイル氏が論じたような長い視野から人と犬の関係を論じるような歴史研究は行われていないというのが正直なところである。その意味で、ミハイル論文

は大きな刺激を与えてくれると言えよう。

一方で、都市（城壁）内外に大量のごみが捨てられ、それを野犬の群れが食べて処理してくれるというようなことを日本の都市では想像することができない。おそらく都市生活の様式や空間認識が全く異なるのではないかと予想する。カイロの現実がその通りだとすると、これは比較史的な検討に値する問題であろう。

ところで、ミハイル論文では、こうした野犬と人に飼われている猟犬や軍事用の犬が、社会的な有用性を持つものとして同列に論じられているように思われる。そのため野犬は、あたかも都市全体によって飼われているような印象を与えられるのである。両者は、人と犬の関係を考える際には区別が必要なのではないだろうか。

それともう一つ気になるのは、ミハイル論文で利用されているのが、状況を描写した叙史的な史料である点である。そのために社会的実態との間に聊かの距離を感じるところもある。冒頭に触れたように、日本近世社会に

おいては都市内の様々な社会集団が多様な史料を作成し、残してきたのだが、ミハイル論文の分析手法は、オスマン帝国社会においては、そうした史料があまり残されていないことにも起因するのではなからうか。そうだとすれば、それ自体が比較史の検討課題であり、本共同研究が俎上に上すべき課題ともいえるのである。

三

いずれにしても、ミハイル論文は、人と動物という切り口からイスラム社会における都市の近代の変容を論じたものであり、オスマン帝国史のみならず、広く都市社会の近代化を考えるための素材を提供する興味深い論稿と言えよう。多くの読者の目にとまることを期待したい。